弥生墓制に見る階層性の検討
―京都府北部を中心に―

福島孝行

1．はじめに

墓の造営というものは全く非生産的な作業である。墓地に用いた土地は少なくともその造営主体が存続する限り、生産活動に使用されることはない。さらに墓の造営に伴う労働は、その労働自体が生産に結びつかないだけでなく、本来生産活動に充てられるべき時間を妨害する。そして遺体に何らかの処理を施したり、棺に納めたり、副葬品を納めたり、土器を供献したりすれば、それに費やされる物資は全く再生産に関わることなく、埋葬という名の遺棄が行われる。とは言え遺体を集落内や住居内、及びその周辺に放置すれば遺体は腐乱し、衛生的に悪影響を及ぼすだけでなく、身近な人間の姿が醜く蝕まれていくのを目の当たりにすることは精神的苦痛を伴うはずである。従って日本の弥生時代においては墓の造営というものは、生産活動を極力妨げない最小限の規模で、なおかつ確実に葬ることが合理的であり、基本となる。

弥生時代初頭において土壙墓や墓壙内及びその上面に施設を施すもの(木棺墓、石棺墓、支石墓)はあるが、北部九州を除いて墓壙周辺に施設を施すものはない。これは先述したとおり墓に必要以上の面積を与えることは、生産地や居住地を圧迫し、生活の維持を困難にするからであろう。

やがて前期も中葉になると大阪の東奈良遺跡などで方形周溝墓が造営され、それまでとは異なった社会的変化が起こった。それまで住居以外の土地の専有を認めなかった社会的慣習を打ち破って、墓域について、人体埋葬に必要最低限の土地をはるかに上まわる面積を溝によって区画し、少数人を葬ることが可能になったのである。これは土地の共同所有の原則を墓地について、逸脱することを認めさせることができる有力者が出現したことを物語っている。しかも方形周溝墓に埋葬された員数が複数であることから、その有力者とは個人ではなく、集団であることが分かる。すなわち方形周溝墓など区画墓の出現は、日本の弥生時代社会においての階層差の発生を意味している。

そこで階層差の展開過程を検討するためにはこうした区画墓を類型化し、地域ごとに時期を追って検討してゆくこととする。

なお、小稿は修士論文を改変したため、事実整理や前提条件の整理を欠いているが、これについては別稿を予定している。

２．墳墓の類型

ａ類　土壙墓ないし木棺墓が群在し、なんら区画を持たないもの。

ｂ類　この類型は墓地内に区画墓と土壙・木棺墓群が併存する状況を表す類型である。

ｂ－１類　墓地内に複数の区画墓と、土壙墓・木棺墓群が併存し、区画墓上には小児用と思われる極端に小規模なものを除くと、規模や施設に差がない墓壙が多数存在するもの。

ｂ－２類　墓地内に複数の区画墓と、土壙墓・木棺墓群が混在し、区画墓上には複数の墓壙が存在するが、主体部の内容・規模等に格差があるもの。

ｂ－３類　墓地内に複数の区画墓と、土壙墓・木棺墓群が併存し、区画墓上には複数の墓壙が存在するが、主体部の内容・規模等に格差があり、中心部に規模の大きな中心主体があるもの。墳丘の格差の有無でｂ－３ａと、ｂ－３ｂに細分し、ｂ－３ａは墳丘格差のないもの、ｂ－３ｂは墳丘格差のあるものとする。

ｂ－４類　墓地内に複数の区画墓と、土壙墓・木棺墓群が併存し、区画墓上には１基の墓壙が存在するもの。墳丘の格差の有無でｂ－４ａと、ｂ－４ｂに細分し、ｂ－４ａは墳丘格差のないもの、ｂ－４ｂは墳丘格差のあるものとする。

ｂ－５類　墓地内に１基の区画墓と、土壙墓・木棺墓群が併存し、区画墓上には規模、内容に格差のある墓壙が複数存在し、中心主体もあるもの。

ｃ類　この類型は墓地内に土壙墓・木棺墓群を伴わず、複数の区画墓が築かれる状況を表す類型である。

ｃ－１類　墓地内に複数のほぼ同形同大の区画墓が築かれ、それぞれの区画墓上にはほぼ同形同大の主体部が多数築かれるもの。

ｃ－２類　墓地内に複数のほぼ同形同大の区画墓が築かれ、それぞれの区画墓には規模、施設の点で他の主体部より優位にある主体部が少数存在するもの。

ｃ－３類　墓地内に複数のほぼ同形同大の区画墓が築かれ、それぞれの区画墓には１基の中心的主体部と少数の副次的主体部とが存在するもの。

ｃ－４類　墓地内に複数のほぼ同形同大の区画墓が築かれ、それぞれの区画墓には１基の主体部が存在するもの。

ｃ－５類　墓地内に複数の、規模、施設の点で異なる区画墓が築かれ、区画墓上には複数のほぼ同形同大の主体部が存在するもの。

ｃ－６類　墓地内に複数の、規模、施設の点で異なる区画墓が築かれ、区画墓上には複

付表１　弥生墳墓の分類基準

分類	細分	区画墓の存在	区画墓と土壙墓の併存	墳丘の優劣	複数の区画墓	主体部数	主体部の優劣	中心主体	墳丘規模50m以上
a類	a類	×	－	－	－	－	－	－	－
b類	b－1類	○	○	無	○	複数	無	－	×
	b－2類	○	○	無	○	複数	有	×	×
	b－3a類	○	○	無	○	複数	有	○	×
	b－3b類	○	○	有	○	複数	有	○	×
	b－4a類	○	○	無	○	1基	－	－	×
	b－4b類	○	○	有	○	1基	－	－	×
	b－5類	○	○	－	×	1基	－	－	×
c類	c－1類	○	×	無	○	複数	無	－	×
	c－2類	○	×	無	○	複数	有	×	×
	c－3類	○	×	無	○	複数	有	○	×
	c－4類	○	×	無	○	1基	－	－	×
	c－5類	○	×	有	○	複数	無	－	×
	c－6類	○	×	有	○	複数	有	×	×
	c－7類	○	×	有	○	複数	有	○	×
	c－8類	○	×	有	○	1基	－	－	×
d類	d－1類	○	×	－	×	複数	無	－	×
	d－2類	○	×	－	×	複数	有	×	×
	d－3類	○	×	－	×	複数	有	○	×
	d－4類	○	×	－	×	1基	－	－	×
e類	e類	○	×	－	×	1基	－	－	○

数の規模、施設、副葬品、供献土器などの点で優位な主体部複数と、簡素な主体部複数とが存在するもの。

c－7類　墓地内に複数の、規模、施設の点で異なる区画墓が築かれ、区画墓上には中心的主体部と少数の副次的主体部が存在するもの。

c－8類　墓地内に複数の、規模、施設の点で異なる区画墓が築かれ、区画墓上には1基の主体部が存在するもの。

d類　この類型は区画墓が単独で存在する状況を示す。

d－1類　単独の区画墓上に同形同大の主体部複数が存在するもの。

d－2類　単独の区画墓上に規模・施設の点で優位なもの複数と、簡素なものが存在するもの。

d－3類　単独の区画墓上に中心主体と、簡素な主体部複数が存在するもの。

d－4類　単独の区画墓上に単独の主体部が存在するもの。

e類　この類型はd－4類の中で、直径ないし一辺が50mを越えるもの。

各類型のモデル化

各類型の、単独区画墓の中心主体は最上級階層に属し、土壙墓群は最下層に属すであろうことは容易に推定できる。そこでこの副葬量や区画墓内での扱いの厚薄の傾斜を利用して各類型が示す社会的階層構造をモデル化してみることとする。

社会構成モデル

ａ類は顕著な階層差が生じていない社会状況を表している。

ｂ－１類は上下２層に分かれるが、階層間の隔絶はそれほど大きくない。上層も複数人で、有力者の間には格差が見られない状態と考えられる。ｂ－２類は上下２層の階層で構成されるが、上層が複数のグループに分かれている。それぞれのグループは複数人によって構成され、グループ内には格差は存在しない。ｂ－３a類は上下２層の階層で構成されるが、上層は複数のグループで構成され、グループ内には格差が存在している。ｂ－３ｂ類は上層グループ内に格差がある上に、グループどうしにも格差が生じている。ｂ－４ａ類は上下２層の階層で構成されるが、上層は基本的に一人だけが埋葬され、グループ内に代表者が現れている。ｂ－４b類は上下２層の階層で構成されるところはｂ－４a類と同様だが、上層グループに格差が生じている。ｂ－５類は１人の上層とその他の一般人という構成になる。ここで首長という地位が生ずると考えられる。

ｃ類では上層と下層の間に大きな隔絶が現れる。最下層の一般人が上層の墓地から排除され、墓地は上層グループが独占するようになる。ｃ－１類では上層は複数のグループに分かれ、グループ内には格差はないが、ｃ－２類には上層にも階層差が生じている。ただし１、２類とも上層、最上層の人物は複数である。ｃ－３類では各グループの上層が１人に絞られ、ｃ－４類では上層に属していた代表者以外の人々は墓地から排除され、一般人と同じ扱いになる。ｃ－５類では上層のグループ間に格差があるものである。しかしグループ内には格差はない。ｃ－６類は５類のグループ内に階層分化が起こったもの。ただし最上層の人物は複数である。ｃ－７類は６類の最上層が１人になったもので、ｃ－８類はグループ内の下層の人々が墓地から排除された状態を表す。

ｄ類は特定のグループないし個人が下層の一般人から隔絶され、単独で墓地を営むものである。ｄ－１類はグループ内に目立った格差がない段階である。ｄ－２類はグループ内に格差が生じている段階である。ｄ－３類は最上層が１人に絞られ、首長が析出される段階である。ｄ－４類はただ１人首長だけが単独に埋葬され、いわゆる特定個人が析出される段階である。

3．各地域の社会構造の変遷

このモデルを実際の遺跡に引き戻して、その地域での社会の構造の変遷と、首長の出現、成長過程を見ていくこととする。

竹野川下流域の大山墳墓群[注1]は中期後葉から後期にかけての築造であるが、b－3b、b－4類の台状墓で構成されている。これは中期後葉の段階、即ち区画墓という墓制が竹野川下流域に導入された時期から既に区画墓に埋葬される有力グループが出現しており、グループの中の代表者が出現しかけている状況が看取される。しかし、区画墓の築造が終了した後も墓地として利用されるところを見ると、後期後葉には有力グループが消滅してしまった可能性が考えられる。中期後葉の坂野丘遺跡[注2]はd－3類で、後期後葉にはd－4類になり、かつての墓を再利用しているとはいえ、首長が順調に成長していく姿が窺われる。

竹野川中上流域の七尾遺跡[注3]は前期末から中期初頭の2基の台状墓であるが、d－3類に属す。ここでは早くも首長が出現している可能性がある。中期中葉のカジヤ遺跡[注4]はc－5類に属す。有力グループは下層の人々から切り放されているが、まだ代表者と呼べるものは析出されていない。後期初頭の帯城10号墓[注5]はd－4類に属し、首長が出現している。同じく後期初頭の三坂神社墳墓群[注6]はc－7類で首長が析出されているが、これに続く後期中葉の左坂墳墓群[注7]ではc－6類に属し、首長が埋没してしまっている。後期末の帯城7～9号墓[注8]はc－3類に属し、B地区はd－3類に属す。A地区とB地区を一つづきの墓地と考えると、A地区はB地区の特定集団より下位にある集団の墓ということになる。

野田川流域の寺岡遺跡[注9]は中期後葉の築造で、d－3類に属し、首長が析出されている。野田川町西谷墳墓群[注10]は後期後葉から末にかけての築造で、c－7類に属す。下層の人々から切り離された上層グループのみで構成され、上層グループ同士も、グループ内も格差が見られ、グループ内には代表者が存在する。従ってこの時点で首長が析出されている可能性がある。

由良川流域の石本遺跡[注11]は中期後葉の築造で、c－6類に属す。下層の人々から切り離された上層グループのみで構成され、上層グループ同士も、グループ内も格差が見られる。中期中葉から後葉の志高遺跡[注12]の方形周溝墓、貼石方形周溝墓、土壙墓群は、b－3b類に属すが、大型の墳墓の平坦面上は不明であるか、あるいは貼石墓の1号墓のように明確な中心主体を持っておらず、首長が析出されていたかどうかは不明である。豊富谷丘陵[注13]の各墳墓群は、後期末の段階で、谷尾谷c－4a類、狸谷ではc－7類、論田はc－7類、大道c－7類これをどう解釈するかはこれらの墳墓群を一つの墓地と考えるか、いくつかの墳墓群に分けて考えるかで分かれる。尾根毎のまとまりを別集落の墓地と考えれば、首長を析出した造墓主体とまだ析出していない造墓主体があることになる。しかしこれを一連

の同じ集落の墓地であるとすれば、集落内に、いくつかの有力グループを中心とした大グループがいくつかあり、各小グループには代表者があり、大グループ中の盟主グループにも代表者がいるという構成になる。

園部町黒田「古墳」(注14)は後期末の築造だが、ｄ－４類に属し、成長した首長の姿が窺われる。ただしこの首長の出現はあまりに突然であり、彼がどこに出自を持つのかは不明と言わざるを得ない。

京都府南部に見られる方形周溝墓は多くが削平を受けて主体部の様子が不明なものが多く、階層性の検討が難しい。長岡京神足遺跡(注15)を例に採れば、神足遺跡はｂ－４b類に属し、格差のある上層グループの代表者が区画墓に埋葬され、その他は同一墓地内に区画を持たずに埋葬されている。

後期末の京都府田辺町田辺遺跡(注16)の方形台状墓はｄ－３類に属している。芝ヶ原墳墓(注17)も後期末の築造で、ｄ－４類である。これも単独の首長墓であるが、この首長の出現も現状では突然と言わざるを得ない。

４．結　語

京都の墳墓に見る弥生時代社会の階層性を探ってきたが、総括すると、最も早く高い階層性を持つ成熟した社会を形成したのは竹野川中流域の、現峰山町の七尾遺跡の造営主体者である。七尾遺跡の造営主体と言えば、報告にもある通り、扇谷遺跡が有力視されている。扇谷遺跡は巨大な環濠で囲まれた前期末から中期初頭の集落遺跡であり、鉄製品、ガラス塊、玉砥石など、注目すべき遺物を出土し、拠点的集落と呼ぶべきものであろう。その上、日本海側の各地に出土する陶けんが出土しており、大陸との直接・間接の交渉が予想され、こういった背景に裏打ちされて、墳墓にも高い階層性が現れているのではないだろうか。

中期後葉には京都府北部の各地で首長が出現するが、坂野丘を除くと、後期に入ってその階層性は後退してしまう。三坂神社墳墓群では後期初頭に首長が出現しているが、これに続く左坂墳墓群ではやはり後退してしまっている。野田川流域では地域を異にするが後期にも首長が存在している。

後期末になると、丹波以南の各地に突然特定の個人のための墳墓が築造される。これらの首長はそれ以前の墳墓とほとんど無関係に成立したかのごとき位置に所在している。

以上京都北部を中心として弥生時代墳墓から階層性を抽出する方法を提案してきたが、ここで抽出された階層性がその造墓主体の階層性を完全に反映しているかといえば、それはまだ不明である。今回の作業で抽出された階層性を、集落遺跡での階層性の分析とつき

あわして検討することが必要である。また、この分類基準は基本的に調査によって明らかになった資料を分析・整理したもであり、今後この分類基準を逸脱する資料が明らかになった場合は、その都度改訂していく必要がある。しかし、この分類基準と階層化モデルを用いれば、区画墓の普及している地域ならどこでも統一的に階層性を議論する下地を作ることができると考える。

なお、小稿の作成にあたって、森浩一先生、細川康晴氏には多大な御指導を賜わりました。記して感謝いたします。

（ふくしま・たかゆき＝京都府教育庁指導部文化財保護課技師）

注１　常盤井智行・松田正信他『丹後大山墳墓群』（京都府丹後町文化財調査報告第一集）　1983　丹後町教育委員会

注２　釋　龍雄・中谷雅治他『坂野』（京都府弥栄町文化財調査報告第２集）　1979　弥栄町教育委員会

注３　田中光浩・林和広『七尾遺跡発掘調査報告書』（京都府峰山町文化財調査報告第８集）　1982　峰山町教育委員会

注４　増田信武・田中光浩『カジヤ遺跡発掘調査報告書』1978　峰山町教育委員会

注５　岡田晃治・肥後弘幸他「(1)帯城墳墓群Ⅱ」『埋蔵文化財発掘調査概報』　1987　京都府教育委員会

注６　今田　昇「大宮町　三坂神社・左坂墳墓群」『第二回　京都府埋蔵文化財研究会発表資料集』　1994　京都府埋蔵文化財研究会

注７　肥後弘幸「[7] 左坂墳墓群(左坂古墳群Ｇ支群)」『埋蔵文化財発掘調査概報』　1994　京都府教育委員会

今田　昇「大宮町　三坂神社・左坂墳墓群」『第二回　京都府埋蔵文化財研究会発表資料集』　1994　京都府埋蔵文化財研究会

注８　注５参照

注９　奥村清一郎他『寺岡遺跡』（京都府野田川町文化財調査報告　第２集）　1988　野田川町教育委員会

注10　西谷墳墓群現地説明会資料　1988　野田川町教育委員会

肥後弘幸「丹後地域の弥生墓制」『京都府埋蔵文化財論集』第２集　1991　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注11　辻本和美・竹原一彦他『京都府遺跡調査報告書』第８冊　石本遺跡　1987　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注12　岩松　保・肥後弘幸他『京都府遺跡調査報告書』第12冊　志高遺跡　1989　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注13　堤圭三郎・増田孝彦他『京都府遺跡調査報告書』第１冊　豊富谷丘陵遺跡　1983　(財)京都府

埋蔵文化財調査研究センター

注14　森下　衛・辻健二郎他『船阪・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』　1991　京都府園部町教育委員会

注15　『長岡京市史』資料編１　1991他

注16　鷹野一太郎『京都府田辺町　興戸遺跡第９次発掘調査概報』（田辺町埋蔵文化財調査報告書第15集）　1992　田辺町教育委員会

注17　川崎公敏・近藤義行『芝ヶ原古墳』（城陽市埋蔵文化財調査報告書　第16集）　1987　城陽市教育委員会

注18　『扇谷遺跡発掘調査報告書』　1975　峰山町教育委員会